

エルネスト・シェノーの美術批評 —ギュスターヴ・モローの評価史をめぐって—

齋藤 達也 (東京大学)

ギュスターヴ・モローは 1860 年代にサロンで次々と作品を発表し、衰退しつつあったフランスの歴史画の刷新を図った。1864 年のサロンに出品された《オイディプスとスフィンクス》はとりわけ話題を集め、テオフィル・ゴーチエやマクシム・デュ・カンらの批評的評価も得た。このふたりと並んで、1860 年代からモローの芸術をおそらく最も熱心に擁護したのが、19 世紀フランスの有力な美術批評家であったエルネスト・シェノー (1833-1890 年) である。モローが象徴主義の代表格とみなされるようになる以前の、1860 年代からの評価史を考える場合、シェノーの的確な批評が持っていた議論形成の力は見過ごせない。モローの受容研究が近年進むなかで、シェノーによるモロー論を単独で中心に据えた研究も求められている。そこで本発表ではシェノーによる批評記事を丹念に分析することで、この批評家がモローの芸術をいかに捉えて評価したのかを明らかにしたい。

シェノーは同時代美術を論じるだけでなく、日本美術に先駆的に注目し、イギリス美術をフランスに紹介するかたわら、芸術家として最も高く評価していたドラクロワのカタログ・レゾネの編纂にも携わるなど、多彩な領域で執筆活動を展開したことで知られる。そのシェノーがドラクロワ亡き後、フランス派の系譜に名を連ねるべき存在として位置づけたのがモローである。その背景には、型にはまったアカデミズム絵画や、現実を写し取るリアリズムや自然主義絵画ではなく、「想像力」を用いる芸術こそが、フランス派の美術の歴史を作るというシェノーの確信があった。シェノーはまた、この「想像力」を最もよく発揮している芸術家としてフランスではモロー、英国ではバーン=ジョーンズを挙げて、広い視野のもとにモローの芸術を位置づけようと試みた。

世紀末になるとモローの芸術はしばしば理想主義と形容されるようになるが、シェノーは早くも 1869 年にモローの芸術を理想主義芸術 (art idéaliste) と定義している。シェノーが 1860 年代にこの語彙をいち早く用いた際の歴史的な脈とその意味合いを検討することで、1860 年代の批評と象徴主義批評との間にある連続性と不連続性の両方が見えてくる。

シェノーとモローに間に直接的なかわりがあったことも見過ごせない。シェノーによるモローの未発表作品の実見、シェノーの著作に対するモローの反応、シェノーの小説『キマイラ』(1879 年) におけるモローへの献辞と作品の複製図版の掲載、シェノーを介した日本美術への関心の芽生え、ギュスターヴ・モロー美術館アーカイヴ所蔵の書簡を通じてわかるふたりの関係性。こうした観点から、画家モローと批評家シェノーの交流にも光を当てたい。